5　〈自分ならでは〉の究め方

i　試練をしのぐ
ii　直感をつかむ
iii　偶然を紡ぐ
iv　習慣をかえる
v　厚意に応える
vi　世界をかえる
vii　節目をとらえる
viii　学びなおす
ix　書く
x　自業四十年

未来とは過去の空間のことなのだ。あるいは、現在を蝶番にして、過去という空間を反転させると、未来という空間になると言っていい。少なくとも人間にとっては、未来とはそういうものだ。

―　三浦雅士　『天生という作品』

©Lee Yamane Kiyomi

試練をしのぐ

流行りのモノやコト（サービス）に乗るのは簡単ですが、いずれ廃れることは目に見えています。〈自分ならでは〉のモノやコトをものにするのは難しいことですが、その先に自信と誇りが待っています。人によろこばれる仕事、その点さえ見失わなければ、必ず顧客に出会います。長い付き合いが続きます。なぜなら、顧客にとっても、〈自分ならでは〉を支えられるからです。

ただし、顧客にめぐり会うまでには時間がかかることが想定されます。おのずと精神的かつ現実的な不安定さが生じます。精神的な不安定さは、先の4・を参考にしてしのぎましょう。現実的な不安定さといえば経済的な問題です。あらかじめ蓄えておくことですが、それとて限りがある。

〈自分ならでは〉という目的を変えないためにも、やり方やプロセスは変える必要もあります。。開業当初はアルバイトしていたというデザイナーもいます。講師業でつないでいたという社労士の人もいます。

そこで大事なことが自律。手段のはずのアルバイトが目的になる可能性もある、その方が楽だから。そうなってしまうと、自信と誇りというご褒美はついてきません。手段が目的にならない自律心。試練をしのぐ鍵といえそうです。

直感をつかむ

ある考えが瞬間的に思い浮かぶ、思いをめぐらせていて、そうだ！と確信的な答が見える。それを意味を感じないはずはないと思いますが、けっして見逃さないこと。これまでとは違う視点や考え方、一つの意思決定、場合によっては自分への戒め。内容が何であれ、掴んで離さないこと。

「なにごとも順調に事が運ぶことはない。いずれ目先の利益に惑わされる時がくるはず。でも、けっして、惑わされまい。そうして道をはずした人の例は数多」

独立の準備を進めていた時、そのことずっと頭の中を占めていたある日、まるで天が授けてくれたように、はっきりと、明確に閃いた答。その時の情景が今も目に浮かびます、よくぞ閃いたものだと。

こういったことは記録しなくても記憶しているものですが、やはり書き残しておきましょう。自業史の大事な局面ですから。この三年後、事務所を持とう！〟と閃いた。どういう未来が待っているか全く予想はできないけど、未知の世界、不安定な状況が自分の許容範囲を広げると感じて。

直感を逃さず、つかむこと。〈自分ならでは〉に道をつけていきます。

偶然を紡ぐ

偶然何かを見た、聞いた、出会った。この「偶然」については、何度も繰り返し書きたくなるほど、「よくぞあの時：」とふり返る出来事や出会いが、自業の道を進めてくれました。

事務所を開設してまただ一年半、診断士を
とって半年のこと、診断士の知人に紹介された
専門家グループ。挨拶程度で終わった面談なのに、追って仕事の打診。大企業の研究所のプロジェクトで外部人材、それも女性を探していて、紹介したいという。アテはせず、顔合わせの場に出かけたら、先方がＯＫ、顧問契約。

クライアントはプロジェクトリーダーとサブリーダー。このサブリーダーが雑談の中で教えてくれた「アフォーダンス」。その後しばらくして新聞にその名を発見。とりあえず切り抜きフォルダーへ。ひと月ほど経った頃、書店で本を探す。選びに選んで買った本の中にまた「アフォーダンス」。ひょっとして、と切り抜きを取り出すと同じ執筆者。

共感しきりのこの本。この偶然の流れにも意味を感じ、著者へ手紙。すると、なんと返信あり。その後続いた著者との交流によって、また新しい知の世界が開かれた。

偶然が重なった時はそのまま収めてしまわず、自分に又は他者に、何か新しい働きかけをしましょう。小さなアプローチも＾自分ならでは＞を開く大きなきっかけ。

習慣をかえる

誰かに教えられなくても経験的にわかることがあります。その一つ、

人生の質は習慣に依存する

食事、睡眠、運動が典型的。二〇〇三年十二月号の日経サイエンスの特集「脳力増強の科学」には、脳の働きを高めるのもこの三つと書いてありました。バランスのとれた食事、適度な運動、そして十分な睡眠。合わせて、仕事や生活環境、施設管理の状況も見逃せないと。

「習慣」を辞書でひいてみると、参照に「習慣は第二の天性」という説明。**「習慣は人の性行に深くしみこんで、生れながらの性質のようになる」（広辞苑）**。「第二の天性」とは初めて知りました。人生の質にかかわるはずです。

まずはどこを居場所にするかが大事。生活空間環境の面だけでなく、接する人、見聞きする情報の種類と質が変わりますから。「朝型」の徳はよく言われていますが、経験的に、朝の早い時間帯は創造的な思考作業にいいと実感します。ちなみに、思索的な文章は万年筆で紙に書いた方が思考が展開するという感触も。

習慣をかえると、五感がかわる感。

厚意に応える

自分の知らないところで誰かが自分のために一肌ぬいでくれている。積極的に仕事の宣伝をしている、推薦している、新しい仕事の機会を調整している、など等。そういうことを想像したことがありますか。２・の「役割の型」でも書いたように、そういうお役を自然に果たす人がいます。それもこの世の中の大事な一面。

厚意に気づく目線、厚意に感謝する心。それは誰にでも大切なことですが、自業を進める人ならなおさら、意識しておきたいもの。厚意に応えるためにも、＜自分ならでは＞に磨きをかけていく、人のためになるよう努める、社会人として大人の振る舞いをする。そして、自分自身もまた誰かに厚意を表す。そうして世の中、守っているのだと思います、けっきょくのところ。

＜自分ならでは＞の先は遠くても、まずはその途上にあると思えるなら、必ず誰かの厚意が働いています。そういったことへの想像力、それに応えるためにはどうあるべきか。この自問は続けたいものです。

あの方、この方、厚意をうけた方を時々ふと思い出します。そういう時は必ず便りを出す。すでに退職した人に元同僚が転送してくれ、電話をもらった時もある。これもまた自業史のひとコマです。

世界をかえる

社会の状況も自分自身も刻々と変化しています。自業を始めておおむね三年が過ぎたあたり、試行錯誤が続くうちに、様々な出来事に接し、人に出会い、学び、認識を新たにする頃。実績はまだ限られますが、こういうことだったのか：と、自分のことも世の中のことにも、少し開眼する頃に、これまでとは違う、仕事の機会、世界を呼び寄せます自分自身が。

思いがけない勧めや誘い。これまでなら受け流していたことでも話を聞いてみる気になる。相手の勧めに、それもそうだと思う。そういう時は乗ってみましょう。慣れ親しんだ世界に安住していては、創造性は拓かれません。

あえて世界を変え、緊張感をともなう状況を創る。安定した状況では出番のない別な＜自分ならでは＞が顔をだします。他からやってこない場合は、自分から創りましょう。どのような場で、どういう仕事をすれば自業の可能性が広がるか、想像してみてください。少々の背伸びもかまいません。ともかく、そのために動いてみる。

その動き自体が波を起す。動き先ではなく、別な方向から機会がやってくるとがあります。そういう経験をするから、「偶然」を持ち出すようにもなるのです。

節目をとらえる

時間の流れとともに、環境も自分自身も変りますから、自業の道のりを大きな流れで眺め、足取りをつけていくこと。

まず先におさえたいのは、節目をとらえる目安です。「商い三年」、「十年一昔」は先人たちの貴重な経験則。新しい試みの小さな節目はおおよそ三年。その三年を三回積み重ねたあたりで十年目の大きな節目を迎える。そして、その十年を五旬過ぎた頃、構造の大転換がある。一九四五年の終戦から五十年後の一九九五は日本におけるインターネット元年。バブルとその崩壊が新旧の時代交代の転換期。

五十年で変り、歴史を刻む社会。それに対し一人の人間はというと寿命がある。そこで、自業を始めて究める期間は四十年と定めます。大学を卒業し、社会生活を十年ほど経験したのち、三十半ばで自業を始めたとすれば、七十半ばを節目として、あとは流れにまかせ、無に徹し、終末を迎える。前半二十年は、自業を「追求」する前期、後半二十年は、自業を「追究」する後期。後期の仕事でライフワーク化して、終生の仕事とする。

自業に完成はない。だからこそ、生きがいになり、苦しくも仕合わせな後半生となるのかもしれません。

学びなおす

自業四十年。長いようで短い、短いようで長い道のりです。どのような業でも起業すれば起業家はとどまることはできません。時間の流れ、社会の変化に応じて、何かしら新しい試みをしていかなければ続きませんから。起業は簡単、続けるは至難。

「究めればそこが天職」。八十五歳の「自業家」の大先輩からいただいた額にそう刻まれています。究める努力の積み重ね。その先に、自他ともに認める自業が出来上がっている。



自業四十年の前半二十年を、後半の二十年につなげるためには、腰をすえた「学び」が必要になる。過去の蓄積とそのつど習得してきたことで賄えるのは前半二十年まで。前半が終わる手前ぐらいで、このままでいいのだろうか：と自問するはずですから、節目に織り込んでおきましょう。

いずれそういう時が来る。「学び」を自分のものにするまでに三年はかかるかもしれない。おのずとお金もかかることになる。そこで、将来の大切な学びのために早い段階から準備をし始めること。そうしておけばよかったと、その時になって慌てないように。

書く

「話すこと書くことは魂の労働。特に書くことが大事」

昨年来よく引用している批評家の一言です。たしかに、人に見せなくても、書いていくうちに、頭の中が整理され、心がいい具合に着地し、客観的に自分をみることができます。違う角度から新しい着想がわくことも少なくありません。自業の道のりは自身の最期が自業の最後。それまでずっと自問自答を続けることになります。書くことを勧められたからではなく、書かざるをえなくなるはずです。

二〇〇九年七月二十八日付け日経新聞に、『「書く」と「話す」は大きな違い』という特集記事が掲載されていました。

「話す」では言葉以外の要素が重要。例えばリーダーシップの領域なら、「信念」。

「書く」では、書き手からでさえ、相対的に自立して、自らリアリティーを追求する独自の生き物となる。例えばビジネス上の企画書が、予め企図していたように言葉が流れていかないことが、ままある。

書いて目に見る。言葉の意味が、認識の幅を広げて、新しい世界をつくりだすことがある。さぁ、出来事は二割にとどめて、感じ考えたことを書いていきましょう。

自業四十年

「そうか、四十年で考えればいいんだ…長い時間をかけて創りあげていくんだ…と思うと肩の力がすっとぬけました」

ある女性創業塾の帰り、駅で一緒になった三十代のプチ起業した女性。「自業四十年」がすごく印象に残ったそうです。

自業の前半の二十年は、ある種、フィールドワーク期。実践をとおして、何が、どこが＜自分ならでは＞なのかを、自己発見、自己認識していく期間。

前期が終わる頃には、自他ともに認める実績重なり、年齢もまた重なる。世の中も変化し、価値基準も変わる。その前に、世の中が変わっても変らない独自の価値を備えておく。先の「学びなおす」その関所。

すぐには実利を伴わないし、腰をすえてじっくり臨めないかもしれません。もしそう想定されるなら、前期の早々に、日々に、「学びなおず」時間を組み入れる必要あり。短い時間いい仕事をして、浮いた時間を「学び」にまわす。

人によろこばれる仕事をしながら自分の価値観に合った生き方をする。ライフワークといえるものに出会い、究める。天職で天寿を全うする。それこそ、仕合わせというものではないでしょうか。